

日本文化部会 I

【概要】

清水真裕*

日本文化部会 I は、2015年12月14日の午後 1 時からお茶の水女子大学文教育学部 1 号館第一会議室で行われた。「異文化研究と日本学」というテーマにふさわしく、多様な問題意識や視角に基づいて下記の研究発表がなされ、大変有意義な会となった。

1. 「和辻哲郎の「情死」理解について」荒木夏乃（お茶の水女子大学院生）
2. 「岡倉天心の『茶の本』に関する一考察」葉晶晶（北京外国語大学院生）
3. 「奈良時代における孟子受容に関する一考察－『日本書紀』を中心に－」潘蕾（北京外国語大学講師）
4. 「クラシック音楽教育－ポーランドと日本の比較－」ベアタ・コヴァルチック（ワルシャワ大学院生）
5. 「日本における個－現代日本の非婚の母の場合－」猿ヶ澤かなえ（パリ・ディドロ大学、INALCO院生）

以下、それぞれの発表の概略を述べていく。

(1) 荒木さんは、和辻哲郎の倫理学と「情死」理解の関係性を、様々な著作を通して考察した。「恋愛」の表現は「情死」や「心中」、即ち「男女の理念的合一」に極まるが、それは人倫組織を基礎とする共同体の秩序の枠には収まらないものである。しかし、和辻はそのような「日本的恋愛」から、肉体的生命に対するあきらめや放棄に及ぶ勇敢さ、穏やかな風土との関連性、その私的性格を

乗り越えて周囲に及ぼす影響等を汲み取っている。さらに、主著とされる『倫理学』においては、「男女の愛」はどんな状況下でも結ばれうる人倫の一つであり、それは間柄性を持ち、個性の表現である「肉体」という要素を通してはじめて成り立つとされているとした。

質疑応答では、秩序を重んじる共同性と相反する「情死」の位置付けがあらためて問題となった。倫理的には危うさをはらんだ「情死」であるが、和辻はこれを否定するより、むしろ様々な文化論的意義を有するものと評価しており、今後、和辻の思想との関係性がさらに明確になることが期待された。

(2) 葉さんは、岡倉天心がどのような動機によって、また、どのような背景を以て『茶の本』を執筆したかを、本書の内容や岡倉天心の来歴、当時の茶道を取り巻く状況等から検討した。天心自身は、知人親戚等を通し茶と多くの接点を持っていた。当時、茶は支持者を減らし危機的状況にあったが、天心はこれに抵抗し、茶を日本文化の中核と位置づけ、道教・禅からの影響と考えられる「不完全なもの美」を重視する姿勢とその文化的影響力等をもって茶の本質と定め、普及につとめた。一方、同時代には益田鈍翁、千賀可蛟、田中仙樵等がそれぞれ茶の価値の見直しと復興につとめていた。その姿勢や立ち位置は様々であるが、これらを天心の茶論と比較すると、国粹的文化としての茶という評価において共通点がみとめられるとされた。

質疑応答では、天心の茶に対する国粹文化的評

*お茶の水女子大学大学院院生

価と世界観（特にアジア）との関係性が問われた。天心は、中国の宋時代以前のすぐれた文化を高く評価し、日本はこれを純粹に受け継ぐことができたものと考えていることが明らかになった。

(3) 潘さんは、日本における『孟子』および「孟子の思想」の受容過程を、『日本書紀』を読み解くことで検討した。『日本書紀』には随所に漢籍による潤色や儒教的影響を見ることができるが、例えば、仁徳天皇が「聖帝」としての描かれた各エピソード、「憲法十七条」の条文等には「孟子」との共通性が存在すると指摘できる。一方で、他の漢籍（『礼記』、『史記』等）にも類似の文は存在し、『日本書紀』は『孟子』それ自体から直接的ではなく、それらの書から間接的に「孟子」の影響を受けた可能性もある。また、天智天皇・天武天皇の諡号には、殷周革命に由来する可能性のある言葉も見受けられ、革命思想の影響を考へることもできる。

質疑応答では、「孟子」は日本の文化や政治体制との違いから、その受容が遅れたと歴史的に捉えられてきたものの、『日本書紀』にはそのような「孟子」と天皇制との矛盾については触れられておらず、「孟子」の受容は奈良時代というかなり早い時期からなされたと考えられるとされた。

(4) コヴァルチックさんは、ポーランドと日本双方の演奏家の教育課程とキャリアを、インタビューや活動調査から比較検討し、その内容を報告した。クラシック音楽家となるに至るには「適切な教育」が必要となるが、ポーランドと日本ではその教育課程や師弟関係（Career Coupling Process）、重視する能力や知識等が異なっている。例えば、ポーランドでは音楽教育に特化した小学校等が存在し、そこでは演奏方法の他、音楽に関する教養等も学ぶことができる。また、「先生」をその経歴などによって自らヨーロッパ中から探し選択し、頻繁に変える傾向がある。そして、その教育においては、表現や解釈についての自発性が求められる。これに対し、日本の音楽教育はプ

ライベートレッスンや音楽教室により、また、上下関係・師弟関係が明確で、それは長きにわたって継続し、留学先の決定等にも影響を及ぼす。さらに、その教育においては、技術の伝達が重要視される。こうした考察の上に立って、世界の音楽界で活躍するためには、世界の音楽教育とキャリア形成の在り方にも目を向ける必要があることが示された。

発表後、なぜ日本は、技術を重視する傾向が強く、教養的面が弱いのかという質問に対し、音楽学校の教育内容や両親の果たす役割など、環境の違いが指摘された。

(5) 猿ヶ澤さんは、日本の「非婚の母」たちに対するインタビュー調査を通して、日本における「個」の存在を明らかにした。先行研究では、日本では母となる女性にとって婚姻は不可欠であり、非婚は例外に過ぎないと捉えられていた。しかし、ある社会を観察する上で、それがたとえ少数であっても「個人」の意識を検討・理解することは必須である。発表では、様々な年齢、職業、来歴の非婚の母を3タイプに分け、そのうち①「結婚を希望していた、あるいは今後希望している」、③「結婚を拒否している」の2タイプが主として報告された。彼女たちは、結婚・出産・人生・家族に対してそれぞれの考え方を持っており、その形態や立場の選択が個人のアイデンティティの獲得や保持に繋がっていることが指摘された。これにより、日本社会にも自らの意思で自らの在り方を決定する「個」としての母が存在することが明らかになった。

質疑応答においては、ウーマンリブ運動との関連についても問題となった。70年代以降の婚外子の増加や、80年代以降の事実婚の増加などに、この運動が影響を与えていることが示唆された。